

## 2023年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）

短大基準協会	事業計画	23 内容と成果
<b>基準 I 建学の精神と教育の効果</b>		
<b>A 建学の精神</b>		
1 建学の精神		<p>2023年度は、建学の精神を具現化するために、全学の学生教職員を対象にして学期中、毎週2回（関C）1回（各務原C）のチャペルアワーを実施した。チャペルアワーでは、建学の精神を幅広い立場から理解することを目的として、引き続きノンクリスチャン教職員及び各学部学科生によるスピーチを実施した。7月には、本学科1年生全員が「宗教講演会」に出席した。9月には全学の教職員を対象にした「キリスト教研修会」が開催され、八木橋教授が講師として本学のキリスト教精神の形成過程について講演した。12月の「クリスマス礼拝」は、説教者に日本基督教団教賀教会牧師の有岡先生を招き、各人にとってのイエス降誕の意味を分かりやすく解き明かして頂いた。大学・短期大学から371名が参加した。本学科学生教職員もオルガン・ハンドベル・ピアノ演奏、聖歌隊、聖書の朗読者としての役割を担った。本学科においては、1年生全員の「キリスト教概論 I」の履修とチャペル出席への奨励、11月に1・2年生合同で実習激励会を実施した。式中の片桐短期大学部学長講話と祈祷により、実習という大きな学びの場においても建学の精神を意識付けた。</p>
2 地域貢献		<p>2023年度は、「美濃加茂市“木育”で世代をつなぐSDGsプロジェクト 2」が2022年度に引き続き杉山ゼミで取り組まれた。今年度は、利用済みの木を再利用する取り組みを実施し、本来のSDGs的な取組を行った。学生が地域の方と協力し、木育について考える機会となっている。</p> <p>また、2023年度はNPO法人ぎふ多胎ネット主催「多胎ファミリーフェスタ」が多胎児およびその保護者の方たちを迎えての実施となった。参加者は100名と多くの方たちに参加していただけるものとなった。幼児教育学科1・2年生の学生ボランティアは36名が参加し、乳幼児の託児や子どもたちに遊びの提供をした。学生は実習以外に幅広い年齢の子どもたちや保護者と接する機会が少ないため、このボランティアは子どもたちや保護者の方と直接触れ合うことができる貴重な機会となっている。長期に渡りこのボランティアを行っているため、以前この行事に多胎児として参加していたお子さんが高校生になり、本学幼児教育学科への入学を希望していると聞いている。主催者を始め保護者の方からも子どもに対する姿勢に好感が持てるかと高評価を得ている。</p>
<b>B 教育の目的・学習効果</b>		
1 教育の目的		<p>幼児教育学科では、カリキュラムポリシーに基づき、保育実践力と人間関係力の育成を行っている。その成果に合わせ様々な資格を授与している。保育士資格と幼稚園教諭二種免許状を授与することを基本とし、児童厚生二級指導員資格等4種の資格と中部学院大学短期大学部独自の認定幼児英語と、幼児教育学科独自の3種の認定資格を授与している。大学や学科独自の認定資格は、学生が保育現場に就職した際に、自分自身の強みを持ち専門性を生かせる技能である。資格取得を目指すことで、2年間の授業や実習において一層前向きに取り組む姿が見られた。また、授業科目について、全教員がシラバスにディプロマポリシーとの関連を明記した。それにより、学生にとって現在の学びがどのような教育的目標に向かっているのかが明確になった。</p> <p>卒後、社会で自立するための人間形成を2年間で行わなければならない。高校時代がコロナ禍であった学生にとって、異学年である1・2年生交流は重要である。実習激励会・交流会、たのしみん祭、部活・サークル活動を通して、多様な立場の仲間とのコミュニケーション力を向上させ、複雑な現代社会で自分らしさを発揮できる社会人を目指すことも目的とする。</p>
2 学習成果	・多様化する学生への対応	<p>多様化する学生への対応では、ゼミナール担当教員を中心に学習への支援と学生生活の支援を行ってきた。学科でのサポートに加え、学生課、保健室といった各部署と連携して対応している。</p> <p>就職においても、学生の希望が細分化している為、キャリア支援課及びキャリア支援を担当する教員のもと個別的な指導を実施している。2023年度は1年次においてキャリア支援講座を開講した。2年次では従来の就職活動支援に加え、保育魅力セミナーを実施した。</p>

短大基準協会	事業計画	23 内容と成果
	・離職者訓練制度入学学生の学習	2023年度は離職者訓練制度入学学生を11名受け入れた。オリエンテーション期間中に、訓練生のための独自のガイダンス時間も設定し、訓練制度利用による学びの自覚を啓発する機会とした。 また、入学後早い段階で訓練生担当者と訓練生との話し合いの時間を設定し、コミュニケーションをして不安の軽減が図られた。
	・離職者訓練生度入学学生のキャリア支援	離職者訓練制度入学の学生は、就職活動において年齢制限や勤務形態、勤務地など、多様な条件を考慮した上で満足していく就職先を選定していく必要があった。就職活動の進捗状況や相談は、主にゼミナール教員がキャリア支援センターと連携し、それぞれの学生の実情に沿った支援を行ったが、必要に応じて教員の専門領域に合わせた支援を行った。就職活動が滞る学生もいたが、教職員の連携により、希望に沿った就職をすることができた。
<b>C 教育の効果</b>		
1 アセスメント結果活用の推進		2023年度は、これまで実施してきたように、オンラインでの実施をした。ポータルのみでなく、各ゼミ教員から指示を出すことで速やかに回答する学生が大部分を占めていた。また、未回答の学生にはゼミ教員が連絡を取り、期限内に高い回答率を得られた。 また、2023年度第3回_短大教育改革委員会で、「アセスメントテスト（PROGテスト）の今後に向けて」が協議され、承認がなされた。内容は以下の通りである。 ・現行のPROGテストは2023年度をもって廃止とする。 ・2024年度以降は、「学生調査」および「卒業時学生調査」において、「学修成果の可視化を趣旨とした設問」を配置し、それをPROGテストの代替とする。
<b>基準Ⅱ 教育課程と学生支援</b>		
<b>A 教育課程</b>		
1 教育課程編成・実施の方針	・専門ゼミナールコースの見直し	2023年度は①あそびすとコース、②障がい児支援コース、③子育て支援コースの3コース、各コースに教員2名の体制でスタートした。2022年度の課題であった「1年生には2年生の各コースへの理解を深める機会を持つことが重要であり、翌年のゼミ選択を円滑にするきっかけとなる」に対応するために、在学生オリエンテーション時に、各担当教員による説明だけでなく、学生に対して約1週間の質問期間を設けた。そのため、学生にとっては、各ゼミのことを十分に理解することができたのではないかと思われる。
	・学科の独自性を生かしたカリキュラム（学内認定資格）	学科認定資格は、指定科目の一定の成績を取得し、そのうえで独自の試験を受験して取得できる。「認定発達支援士（インクルーシブサポーター）」5名、「キッズフードマイスター」2名に学科認定資格を授与することができた。
2 入学者受け入れの方針	・学生募集の方針と現状	アドミッションポリシーに即して入学生の定員確保に努めている。自己実現入試、自己推薦入試、指定校等推薦入試いずれの実施に際しても個人面談ないしグループ面談を行い、本学科の受け入れ方針にふさわしい受験生か否かを確認している。その際に、アドミッションポリシーに即した質問を受験生に問うことで、受験生の意志を引き出し、意識を高める効果を得ている。しかし、少子化の影響により全体の入学者数減少を招いたが、指定校入試は2022年度より6名増加した。 離職者等訓練生の受け入れも6期目を迎え、安定した入学者確保となっている。ニーズに届く情報発信を的確に行う方法を積み重ねていくことができた。特に学内説明会では、実際のキャンパスにおいて説明を受けた後、学生のイメージを明確にするためのキャンパスツアーを実行した。さらに、現役の訓練生が出席し、説明や質疑応答をすることで、不安の払拭に寄与した。これらの結果、入学予定者数は現役高校生46名、離職者等訓練生11名となった。
3 受験生に対する受け入れ方針の明確化	・オープンキャンパス	2023年度のオープンキャンパス参加者は、5月：51名、6月：45名、7月：66名、8月（2回合算）：117名であった。2023年度は、在学生が主体となったオープンキャンパスを実施した。司会進行、学科イベント、フリートーク等は在学生が直接高校生と関わることで、高校生が学校生活をより具体的にイメージしやすいようにした。また、学科独自カリキュラムの「手品」を学科イベントに導入した。その際、本学附属の桐が丘幼稚園の5歳児親子を招待して学生が手品を用いたオペレッタを披露した。子どもの実際の反応を直接見る機会を設けたことで高校生が本学の取り組みを理解することにつながった。さらに、本学で実施している「卒業生からのメッセージ」や「学科独自資格」、「学科独自のカリキュラム」の広報など含め、他校との差別化を図りアピールしている。

短大基準協会	事業計画	23 内容と成果
	・高校生に対する模擬授業	<p>高校での模擬授業は2023年度は28件であった。主に高校1・2年生を対象とした模擬授業では、幼児教育関係の学校に進学を希望する生徒だけでなく、進路選択のひとつとして保育に興味を持っている生徒も多いため、その入口となるよう教員らが専門性を活かして体験的な学びを実施してきた。指定校推薦の応募では、昨年度と比較し、34名から45名へと増加した。本学院の高校である済美高等学校の応募者は5名から23名に増加した。前年度の課題を踏まえて、済美高等学校の保育科の教員との連携を重点的に行った。出張講義をはじめ行事にも足を運び高校生と直接関わる機会を設けた。また、高校生と中学生が交流する場での説明会にも参加した。この他に、保育科のある高校とこうした新たな取り組みに加えて、これまでの進路指導担当教員に在校生の様子や就職先の情報をきめ細やかに提供する地道な活動も効果的だった。</p> <p>入試広報として卒業生である本学科1年生の写真とメッセージを付したメッセージシートを作製し、各高校へ持参（2015年～）している。例年、各高校進路指導室前の掲示板への貼り出されている。このように、双方の情報交換を毎年積み重ね、信頼関係を確立し、安心して送り出していただく関係を構築する。</p>
	・高大連携科目（保育・教育はじめの一步）	<p>高大連携科目である「保育・教育はじめの一步」を、済美高等学校保育科との間で教育学部との共同で実施した。2023年度より、2年生に加え、1年生も対象とする講義体制になった。2年生は全15回の講義となり、その内6回を、また1年生は全9回の講義となり、その内6回を幼児教育学科が担当した。高校生は2年生30名、1年生は20名に対して講義及び演習（合同授業を含む）を行った。また高校教員からの要望を伺いながら、幼児教育学科の特色を生かした教授内容かつ、高校生の学習状況に沿った講義を展開した。</p> <p>本事業の成果として、高校生からは保育科で行う保育実習に向けての記録の書き方など、実践的な授業内容についての評価が得られた。高校教員からは、対象生徒が保育分野に関する興味を一層抱くことにつながったという評価を得た。</p> <p>連携先となる済美高等学校が本事業を通して生徒の進路を選択するきっかけになると共に、幼児教育学科のアドミッションポリシーを伝える機会にもなった。</p>
	・高校生向け表現講座の取り組み	<p>表現講座では「保育技術検定」の取得を目指す高校生を対象にした講座を考案した。内容は保育技術検定の過去問を活用したピアノと造形の実技試験対策である。表現講座の内容と案内を示した広告を作成し、オープンキャンパスへの参加高校生に対して配布及び実習訪問時に実習園へ配布した。</p>
	・離職者訓練生の受け入れ	<p>2023年度は訓練生募集のフリーペーパーの配布地域を「関市・美濃市」「各務原市」「可児市・御嵩町・美濃加茂市・坂祝町・富加町・川辺町・八百津町・七宗町・白川町・東白川村」「岐阜市・山県市・羽島郡岐南町・笠松町」とした。昨年度よりも配布地域を拡大し、岐阜市方面にも配布した。また、関市・岐阜市・大垣市・多治見市・美濃加茂市・犬山市（愛知県）・一宮市（愛知県）の各ハローワークに教員が訪問し、パンフレット配布と合わせて訓練生募集に関する情報収集を行った。ここで聞き取った情報を反映する形で学内で4回の訓練生説明会を実施した。訓練生説明会では、現役訓練生にも参加してもらい、実際の学生生活などを説明する機会も設けた。</p>
	・多媒体による広報	<p>2023年度は、これまでの取り組みを継続して学内ホームページ、学科独自パンフレット、ゼミ活動や学生生活を紹介したあそびすと新聞を作成して広報を行った。新しい取り組みとして、本学が開設した公式Tik Tokに動画を載せた。従来は紙面ベースの広報が中心であったが、SNSを活用した広報を用いたことで高校生にも視聴されるような内容を検討することにつながった。</p>
4 学習成果の査定	・評価の方法	<p>幼稚園教育実習及び保育実習（保育所・施設）の評価票におけるルーブリック評価の実用化に向けて取り組んだ。幼稚園・保育所チームと施設チームに分けて取り組み、全国保育士養成協議会の「保育実習指導のミニマムスタンダード」、実習指導者、学生の意見を踏まえたルーブリック評価票を開発することができた。</p>
	・各種実習の成果と新たな取組	<p>2023年度は新型コロナ対策を大幅に緩和し、各実習園や施設の事情を考慮しながら、実習を実施することができた。</p> <p>例年1・2年生合同で行う実習激励会と交流会は、新型コロナ対策を踏まえながら、ほぼ新型コロナ前と同じ内容で実施することができた。</p> <p>個性豊かな学生や社会人（訓練生も含む）が入学するようになってきているため、画一的な指導では難しい学生が増えてきている。しかしながら、実習担当教員や実習助手は、学生一人ひとりの状況に応じて対応することで、学生の成長を促すことができています。</p>

短大基準協会	事業計画	23 内容と成果
5 学生の卒業後評価	・卒業生の把握と卒業教育	<p>学祭及び巡回実習指導等において、リカレント教育に関するアンケートへの協力を依頼し、41名より回答を得た。その結果、対面希望の場合はワークショップ形式、オンライン希望の場合は講義形式の講座が望まれていることが明らかとなった。講義テーマの希望は多岐に及んだため、今後卒業生のニーズに応じた卒業教育ができるようにしていきたい。</p> <p>2022年度の卒業生及び就職先事業所を対象に、本学の教育評価（アンケート）を実施した。卒業生回収率は21.4%から37%へ、就職先回収率は40.7%から57.9%へ上昇したため、より実態に近い結果が得られるようになっていると思われる。</p>
<b>B 学生支援</b>		
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用	・FD活動への取り組み	<p>2023年度は2回のFD研修を予定した。</p> <p>第1回目は9月27日に『大学教育評価アンケートの結果からみる今後の短期大学部のカリキュラムについて検討』をテーマに卒業生からのアンケート結果を検討資料とし、各学科を2グループに分けて討論を実施してもらい、その後、今回のテーマについて個人での意見を自由に発表してもらった。2022年度まではグループワークが中心であり、テーマについて個人の意見を述べる場はなかったが、今回は個人のテーマとして自分がこのアンケートからわかる課題についてどう考えるかを述べる機会を持った。多くの違う意見や一致する意見が出て良い学びとなった。</p> <p>第2回目は4大と合同で3月14日に『教育・研究活動におけるICTの活用に関する倫理』を岐阜大学医学系研究科 医科学専攻 生命関係学講座 医学系倫理・社会医学分野 教授 塚田 敬義 氏を迎えて実施した。特に医学的分野の倫理申請をする時に役立つ話を講師の先生からうかがうことができた。今後私たちが研究を進める上で、十分配慮しなければならないことについて理解するとともに、さらに積極的に研究を進めていくことの重要性を大学教員として再確認した。</p>
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・入学前教育の取り組み	<p>2023年度の入学前研修は、これまでと同様、半日プログラムで開催をした。参加者は、87名中（現役・国内留学生含む）71名（日本人生徒：65名、国内留学生：6名）であった。</p> <p>はじめは緊張した面持ちの生徒が多かったが、プログラムが進むにつれて、緊張がほぐれ、周りの生徒との交流も増えていった。また今年度は、留学生（今回は国内留学生が参加）の参加もあったが、留学生同士での交流だけでなく、日本人生徒との交流もあった。</p> <p>模擬授業では、グループで活動したことにより交流も深まり、教員とも交流することができていた。</p>
	・初年次教育	<p>初年次教育の基礎ゼミナールでは「大学生活の基本」・「見学実習」・「あそびすと養成講座」とこれまでのカリキュラムを実施した。さらに、今年度より基礎ゼミナールを各務原キャンパスにて実施した。各務原キャンパスでは「学びの森」での活動に加え、各務原キャンパス図書館との連携で絵本のポップアップ作成を企画した。1年次から実践的な学びを行い、保育者として必要な基礎力を培うことができた。</p>
	・新入生研修	<p>2023年度は基礎ゼミナールの一環として、「学びの森」にてゼミごとで遊びウォークを実施した。昨年度とは場所は異なるものの、木育推進員に説明を聞くだけでなく学生自身が自然物を使った遊びを体験する研修プログラムを実施した。五感で自然を感じながら、保育を行う上で大切な「遊び」の楽しさを体感することができた。新たな仲間と共に体験することで、人間関係作りにもつながった。</p>
	・ゼミナール運営の課題と取り組み	<p>基礎ゼミナールでは2023年度から8ゼミから4ゼミへととなり、各務原キャンパスでの実施となった。学生の満足度も高く、関市と各務原市の両キャンパスを活用したカリキュラムを実施した。専門ゼミナールでは個々のコースでの活動に加え、保育の魅力セミナーを実施した。</p>
	・教職実践演習の充実に向けた取り組み	<p>2023年度は、各担当教員の専門性やフィールドに応じて、学生の学びを深めるができた。その成果と学生個々の興味関心と教職実践演習での学びに基づいた卒業研究に取り組んだ。その成果を、卒業研究発表会で全学生が発表した。</p>

短大基準協会	事業計画	23 内容と成果
	・ボランティア活動の推進	<p>2023年度の学生によるボランティア活動は12件であった。延べ人数67名の幼児教育学科1・2年生が参加した。ゼミでのボランティア参加の減少により、今年度の活動件数は大幅に減少したが、個人で参加する学生は増加しており、活動の幅も広がった。</p> <p>昨年度より実施しているteamsを用いたボランティア募集の周知・参加希望者の集約により、確実に学生全員に情報が届くことが定着してきている。2022年度の課題を踏まえ、学生課への依頼も学科として学生に共有した。掲示板では情報を得られていなかったが、学科での周知により参加する学生がいたため、学内での共有も活動の幅の広がりに寄与したと思われる。</p>
	・卒業研究発表会の取り組み	<p>卒業研究発表会の形式は2021年度に引き続き、2年生全員が各自の卒業研究を発表し、1年生が聴講する「卒業研究発表会」とした。</p> <p>両学年の学生を9の分科会に分け、各分科会はそれぞれの専門ゼミナールの学生で構成されるように配置した。2年生は自分の研究をまとめ発表するとともに、分科会の運営も担うことで、責任をもって当日に臨むことが出来た。昨年度の課題から、卒業研究発表会の委員会を2回実施し、準備状況の確認を行なったことで当日滞りなく進行できた。</p>
	・新沢としひこ客員教授特別講義	<p>両学年が在学中に1度は対面の特別講義を受講できることとしているため、2022年度に引き続き2023年度も特別講義を開催した。「音楽を介した子どもの理解やコミュニケーション法」を学ぶ機会は、学生と講師が対面で同じ空間にいることにより、五感を通して体験することができた。2年生は2度目の受講で、新沢先生の世界観をより深く理解でき、現場の保育士のイメージをもって多くを学ぶことができた。1年生は、子どもの頃から親しんできた歌の作者に直接会い生の歌を鑑賞できたことに多くの感動を呼び起こした。学生の振り返りシートには、日頃話をしない仲間とも音楽を通して交流できた喜びや、新沢としひこ先生の音楽作品にまつわる感想や思い出が多く記載されていた。なお、特別講義の様子を、大学公式YOUTUBE等で配信し、本学ならではの学びの機会の紹介とした。</p>
3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援	・学生生活支援（修学支援資金の獲得と取得者の学修状況）	<p>「岐阜県保育士修学資金貸付制度」では、窓口である学生課とゼミ担当教員により、必要とする学生への手続きの支援を行った。また、手続き後も学生個々の学修状況を踏まえ、ゼミナール担当教員より個別指導を行った。</p>
	・学習支援	<p>2023年度はこれまでと同様、学修の遅れや出席の状況等学生の様子について把握し早期に対応することができた。主に学生の学修状況については学科会議等で共有し、学科として共通理解するよう努めた。また、ゼミ担当教員が中心となり学生支援室及び学生相談室につないでいる。内容によっては、保護者との連携をとり課題解決を目指すなど、きめ細やかな支援を行っている。単位を取得できなかった学生に対しては、各ゼミ担当教員が面談を実施するなど個別に対応を行った。その中で、卒業や資格取得に必要な授業科目などを説明し、学習意欲を維持できるように支援した。</p>
4 進路支援	・就職100%に向けた取り組み	<p>就職内定率の過程は、例年と比べ非常に早いスピードで進み、20%以上上回る時期もあった。就職ガイダンスを2年の初回合同ゼミで行い、教員とキャリア支援センターで連携し、要支援学生についてはより手厚く支援できたことで、この結果に繋がったと思われる。資格の大原から講師を招き、今年度で3回目となる学科独自の「面接対策講座（公務員対策講座）」を実施したことで、就職活動への意欲が高まった学生がいた。</p> <p>1年生に対しては、例年の予定に追加して、12月に就職ガイダンス（公務員）をキャリア支援センターに実施していただいた。その直後から公務員試験の勉強を開始したり、キャリア支援センターを来訪するなど学生の姿勢に変化があった。</p>
	・編入試験の受験を促す取り組み	<p>四年制大学への編入学の仕組み、および編入のメリットについて、両学年とも4月のオリエンテーションで周知した。また、2年生は専門ゼミナールのキャリア教育に組み込み丁寧な説明を行った。</p> <p>2023年度は、1名の教育学部及び2名の人間福祉学部への編入が決まった。</p>
<b>基準Ⅲ 教育資源と財的資源</b>		
<b>A 人的資源</b>		

短大基準協会	事業計画	23 内容と成果
1 教育課程編成・実施の方針に基づく教員組織の整備	・専任教員の業績の充実	2023年度科学研究費は、若手教員2名が採択を受けることができた。2024年度も、外部資金獲得に積極的に応募している。 また、2021年度より始めた実習評価のルーブリック化の研究は、2023年度では保育実習に加え、施設実習での活用への試みへと発展をしている。長年にわたり継続的に取り組む研究が根付く土壌となっていることは、研究の場として機能していると言える。また、各教員は研究成果を学会発表、論文として学会誌、教職実践研究及び大学紀要等に積極的に投稿し研鑽を積んでいる。
	・教員研修の推進	2023年度は全国保育士養成セミナーがハイブリッド開催となり、幼児教育学科教員2名が参加し、全大会や分野別検討会での情報を共有することができた。中部ブロックセミナー1名が参加し、意見交換や情報収集を積極的にすることができた。また、全国保育士養成協議会の実習指導者認定講習にも積極的に申し込みをし、分野別の3名がその資格を得ている。セミナー等で得た資料は、学科教員で回覧し情報を共有した。
その他	・地域連携活動の充実（各市町村及び企業等との連携）	2023年度も、美濃加茂市と連携して、美濃加茂市が推進する木育事業に関する取り組みである「美濃加茂市“木育”で世代をつなぐSDGsプロジェクト2023」を実施し（2023年度 学生による地域貢献活動）、専門ゼミナールの学生9名が参加した。 また、「多胎ファミリーフェスタ2023」が関キャンパスにて実施され、幼児教育学科1・2年生36名が参加をした。 この他にも、各ゼミ活動の一環で、保育園・幼稚園での誕生日会や、体力測定、遊びの提供などの地域連携活動を行った。
	・国際交流活動の実施	2023年度は、4週間のカナダ短期留学とべ6日間のベトナム海外研修が実施された。ベトナムの研修では、保育園や小児病院など保育にも関連した施設への視察が含まれていたが、幼児教育学科からの参加者はいなかった。
	・新型コロナウイルス感染症の影響下での学科の対応	新型コロナウイルス感染症対応も4年目となった。感染予防に徹し、前期後期ともにコロナ以前の日常に近いキャンパスライフが戻りつつある。講義においては、マスク着用は本人の意志となった。しかし、今年度は演習科目において皆で歌を歌うことはまだ解禁としなかった。また、実習激励会・交流会は、1・2年合同の重要な行事であるため、感染予防に細心の注意を払いながら、十分な交流が実施できた。1・2年生の実習において、新型コロナウイルス感染症の影響は無かった。12月にまた新型コロナウイルス感染症の流行の兆しが社会で報じられたが、幼児教育学科においては、感染者を発生させることなく、1年間及び2年間の学びを結集させることができた。

2023年度短期大学部自己点検・評価(社会福祉学科)

短大基準協会	事業計画	内容と成果
<b>基準Ⅰ 建学の精神・教育の効果</b>		
<b>A 建学の精神</b>		
1 建学の精神		2023年度は、建学の精神を具現化するために、全学の学生教職員を対象にして学期中、毎週2回(関C)1回(各務原C)のチャペルアワーを実施した。チャペルアワーでは、建学の精神を幅広い立場から理解することを目的として、引き続きノンクリスチャン教職員及び各学部学科生によるスピーチを実施した。7月には、本学科1年生全員が「宗教講演会」に出席した。9月には全学の教職員を対象にした「キリスト教研修会」が開催され、八木橋教授が講師として本学のキリスト教精神の形成過程について講演した。12月の「クリスマス礼拝」では、説教者に日本基督教団敦賀教会牧師の有岡先生を招き、各人にとってのイエス降誕の意味を分かりやすく解き明かして頂いた。大学・短期大学から371名が参加した。本学科学生教職員もオルガン・ハンドベル・ピアノ演奏、聖歌隊、聖書の朗読者としての役割を担った。本学科においては、1年生全員の「キリスト教概論Ⅰ」の履修とチャペル出席への奨励、11月に1・2年生合同で実習激励会を実施した。式中の片桐短期大学部学長講話と祈祷により、実習という大きな学びの場においても建学の精神を意識付けた。
2 地域貢献	・地域連携活動の推進	<p>年度の前半で、コロナ感染への対応が2類から5類へ変更されたこともあり、感染への配慮をしながら学科の各コースで学生による地域貢献活動に取り組んだ。介護福祉コースでは、2年生の地域総合演習で「認知症カフェ」や「グループホーム」等での地域交流活動を学生が企画・実施した。美・デザイン、医療事務コースでは、2年生が映像プレゼンテーションⅡの授業で山口市・JA岐阜と連携した山口市の魅力発信に取組んでいる。また、1年生は「SNS活用論Ⅱ」の授業で各務原市観光協会と連携した地域の魅力発信に取組んだ。これらは新聞・テレビ等で取り上げられるなど社会的な関心も高い活動となった。</p> <p>このほか、昨年度に引き続き、外国人介護人材受入支援に関する岐阜県からの委託事業や、介護人材確保・育成に関する補助事業を受け、学科の特性を活かした社会貢献に取組んでいる。</p>
<b>B 教育の効果</b>		
1 教育の目的	・コースの教育目的に関する検討の推進	<p>〔介護福祉コース〕 介護福祉コースでは、2021年度からの介護福祉士養成新カリキュラムで求められる教育内容が本学の科目内で定着しているか、継続的に検討・評価している。具体的には、2年生の学習内容(福祉機器の活用等)について、生活支援技術系科目を担当する教員が研究会等で教育内容と方法の評価・検討をした。また、科研費の補助を受けて、3Dプリンタを使った福祉用具の作成の授業方法や効果の評価を実施している。全体として見ると、福祉機器等を用いた授業方法は学生の関心や意欲を高めていることが確認されている。これに加えて、2024年1月にシラバスに記載している「教育目的」に関する点検見直しをコース教員で分担して実施した。</p> <p>〔美デザイン・医療事務コース〕 本コースでは教育目標として就業力向上を掲げている。その具体策として段階的なコミュニケーション力向上を指向して科目編成と改廃を検討しつつ、複数科目間での連携授業を導入し内容の充実を図ってきた。今年度は連携授業の成果をゼミ活動に集約する取り組みの構築を図り、2年という短期間でいかに提案力・発信力を醸成させるかの課題を達成させる段階に入っている。体験学習の成果として、Jあぐみの、JAぎふとの連携に続き各務原市観光協会との連携も実現している。またイオンリテール(株)との包括連携協定のもとイオンスタイル各務原インターで実施する有給インターンシップも本コース独自の体験学習の場として順調に実施することができた。</p>
2 学習成果	・コースの教育目的の具体化	<p>〔介護福祉コース〕 介護福祉士養成カリキュラムは、介護に対する社会的ニーズの変化に呼応して内容が見直され、学科としてもその都度、教育方法や機器・設備等の整備が必須となっている。特に、機器等は開発速度が早く購入後の更新リスクが高いため、2022年度からは主軸をレンタルに切り替えて、機動性を高める方向にシフトした。さらに、2023年度では、介護現場におけるICT活用を授業内で学ぶことができるよう、関連企業と連携した授業モデルの準備を開始し、2024年度から試行的に導入することとした。</p> <p>〔美デザイン・医療事務コース〕 前年度に引き続き医療事務関連資格およびビジネスマナー関連資格の受験に対応する講義や講座の充実を図った。その結果、医療事務技能認定20名(受験者数21名)、医療事務管理士4名(受験者数7名)、歯科医療事務管理士3名(受験者数5名)が合格となった。 また2021年度から実施している日本歯科医師会歯科助手資格認定制度による歯科助手資格を11名が取得した。 なお、秘書検定およびウエディングプランナー検定については、カリキュラム上の理由で、今年度受験者はなかった。</p>
学習成果に関するアセスメント		「基準Ⅱ-A 4 学習成果の査定」の項に記載
<b>基準Ⅱ 教育課程と学生支援</b>		
<b>A 教育課程</b>		
1 教育課程編成・実施の方針	・効果的な教育への取り組み	<p>社会福祉学科では、地域活動や実習などで科目間の連携や学生の個別支援の必要性が高いため、各コースで例年通り非常勤講師を含む教員懇談会を開催し、教育活動に関する情報の共有化を図った。また、パソコン貸与を受けて、学生とのオンラインでの情報交換や授業での意見聴取が教員ベースで積極的に取り組まれている。</p> <p>介護福祉コースでは、2022年度末に専任教員の退職と採用があったため、専任教員と非常勤講師の担当科目の見直しを行い、2023年度内でも役割の調整に取り組んだ。また、学生へのパソコン貸与を受けて、実習中の記録作成にパソコンを使用することをコース内で検討し、実習先への情報提供と意見交換を踏まえて、部分的な導入を開始した。</p> <p>美デザイン、医療事務コースでは、授業や学生による地域貢献活動に加えて、「学びの森フェスティバル」などの行事参加も含めて、学生が主体的に計画・準備・実施・評価できる活動を推進した。また、医療事務コースの教育効果を高めることを目指して、引き続き関市歯科医師会と中濃厚生病院医療との意見交換を行っている。</p>

短大基準協会	事業計画	内容と成果
	<p>・実習施設等との連携推進による効果的な実習教育と学生の実習満足度の向上</p>	<p>[介護福祉コース] 6月28日(水)の13:00~15:00に、「介護福祉実習連絡会議」をオンライン開催した。介護実習契約施設107施設に参加を求めたところ、44施設(41.1%)の参加があった。今回の会議では、特に、ICT化の流れや学生からの要望および留学生の増加等を鑑み、「実習記録の効率化による実習の内滑実施および学習効果向上」を目的として、PCによる介護実習記録の作成について議論した。その結果、2024年2月の介護過程実習から、介護過程の展開に関する記録類に限定し、PCで作成し紙媒体で提出することを認めることとした。このことにより、「介護総合演習Ⅱ」の授業において、電子化による情報漏洩のリスク回避のための教育を実施した。</p> <p>毎年、学生による授業評価などで、卒業年次生から、「すべての介護実習が2年次の9月に終了すると、その後全く技術演習の授業がないため、就業に向け不安だ」との意見が寄せられている。このような学生の意見を踏まえ、今年度は、学生が、介護実習での学びを介護現場で十分に活用できるよう、学内で学ぶ各科目と介護実習をつなぐ科目である「介護総合演習」の授業内容の見直しを行った。その結果、介護実習で得た貴重な経験をもとに、理論と実践を統合し利用者の個性に合わせて介護サービスを提供できる力を高めることを目的として、2年次後期の「介護総合演習Ⅳ」の授業内で、総合技術演習(グループ演習)を実施するに至った。本授業では、学生がこれまでの介護実習での生活支援およびレクリエーションの実践場面を振り返りながら、介護現場および自身の課題を明らかにし、質の高い実践方法を実演発表することを通して、介護に対する考察を深めることができたことと評価できる。また、エビデンス(根拠)に基づいた介護実践について主体的に討議する学生の姿が見受けられ、介護観の形成につながるアクティブラーニングになったと評価できる。</p> <p>[美・デザイン、医療事務コース] 歯科助手実習も3年目を迎えた。2023年度は「歯科助手実習指導」科目が設定され、実習前後の指導に一定の時間が確保できた。実習先は関西歯科医師会と各務原市歯科医師会に依頼し、受入れ可能な医院に依頼している。2023年度3月には、関西歯科医師会と各務原市歯科医師会の代表者と懇談を行い、これまでの歯科助手実習の振り返りや課題の整理を行い、2024年度以降の実習について検討を行う。学生と実習医院にはWebで回答できるアンケートを行い、その結果を2024年度の実習につなげることで、学生、実習医院の満足度につなげる。医療現場での学びの推進のため、中濃厚生病院に訪問し、学修内容や実習路、学生の特性などを説明した。その後、病院見学を検討したが、日程の都合がつかず、実施できなかった。</p>
	<p>・有給インターシップの整備・充実</p>	<p>[美・デザイン、医療事務コース] 今年度は、コロナ禍以前の状態で実施することができ、6月から両コース合わせて新入生24名のうち23名が有給インターシップを開始することができ、そのうち21名が、「職業体験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(270時間)を修了した。勤務内容については例年に比べて高い評価をいただけており、年度ごとに訓練の質の向上が見られる。医療現場での有給インターシップ導入については、医療機関の就業時間・曜日のニーズと講義日程の調整が難しく、検討を停止している。</p>
	<p>・各コースの教育充実の取り組み</p>	<p>[介護福祉コース] 2023年度は、留学生クラスを4科目増やし、合計10科目について留学生クラスを設けた。「生活支援技術Ⅰ」は日本人学生と留学生の混合でクラス分けを行った。また、国籍にとらわれず学生が協力して学び合えるように基礎ゼミナールにおいても、日本人学生と留学生混合のグループで活動する機会を増やしたことで、学生間での交流も増えた。</p> <p>2021年度から、介護ロボットを含む介護機器や福祉用具を活用した介護技術や3Dプリンタでの福祉用具の作製などを授業に取り入れ継続している。「介護過程Ⅱ」の授業では、昨年に引き続き介護施設から提供してもらった事例で介護過程の展開の演習を行った。</p> <p>2024年度からは、介護ICT教育を外部機関の協力を得ながら実施する予定である。</p> <p>[美・デザイン、医療事務コース] 医療事務などの資格取得を目指す科目では、学生の学習状況に合わせて対策講座や集中講義を計画・実行し十分な学習時間の確保を目指した。結果として成績のアップデートをはじめ学習意欲の向上にも効果を得ることができている。基礎ゼミナールでは選書ツアーなどのアナログメディアに触れる時間の確保など、情報リテラシー確保のための土台作りにも取り組んでおり、職業人としての基盤形成の機会を増やしている。また「映像プレゼンテーション」「地域総合演習」などでは動画作成や手書きPOP作り、プレゼンライドなど相手に思いを伝える手立て・表現技法を学ぶことも実現している。それにより、人と人を取り持つ力や発言、発信、提案力の醸成に寄与している。</p>
	<p>・留学生の学習支援</p>	<p>留学生教育における最優先事項として、日本語能力の向上が挙げられる。そのため、これまで、日本語教育の科目(「介護の日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の60コマ)を設けたり、国際交流・留学生支援課企画の日本語向上講座や日本語能力試験対策講座の受講および岐阜県内外国名留学生日本語弁論大会への参加などを推奨してきた。その結果、今年度の第1回日本語能力試験では、本学科留学生21名がN1を、30名がN2を受験し、前者は5名、後者は14名が合格した。また、第2回日本語能力試験では、本学科留学生20名がN1を、12名がN2を受験し、前者は2名、後者は8名が合格した。日本語弁論大会では、本学科の学生3名が予選を突破し、本選では最優秀賞と優秀賞を受賞した。しかし、卒業時点でN2以上を取得できなかった学生が35名中7名いた。他方、12の専門科目において、昨年度同様に留学生クラスを設け、留学生の特性に合わせた授業を実施した。さらに、来年度入学の留学生が40名を超えるため、留学生クラスを2クラスとする科目を設け、教育の質の担保を図ることとした。その他、2023年7月11日(火)と、2024年3月13日(水)に「留学生受け入れ事業所連絡会」を開催し、事業所との情報交換をするとともに、学科から留学生の抱えている不安や学修上の課題等について報告し、学習および生活支援への理解・協力を求めた。</p>
	<p>・委託訓練生の学修支援</p>	<p>1年生に対しては、4月5日(水)の入学時オリエンテーションにて、教務課および学科担当教員が介護福祉士資格取得をめざすための履修方法について説明している。さらに、日々の履修状況を確認するため教務課とゼミナール担当教員が「訓練生日誌」の記載内容を定期的にチェックするとともに、毎月末に介護福祉士資格取得の必須科目についての出席・受講状況などを把握している。その他、11月9日(木)に訓練生アワーを実施し、訓練生としての心得を確認している。2年生は、5月10日(水)に訓練生アワー、6月24日(土)は卒業生による就職活動についてのレクチャー、7月と1月に個別面談を実施し、学修における支援や就職活動に向けた指導をおこなっている。</p>
	<p>・教養教育と専門教育の接合</p>	<p>社会福祉学科では、コースの特性に応じて基礎科目と専門教育の接合を図ってきた。特に介護福祉コースでは、心理学や社会学などを資格必修科目として専門教育に組み込んでいる。また、関連資格や進学で必修となる教養科目について、オリエンテーションで具体的な履修指導をしている。さらに、コースに必要な情報処理の基礎スキルについて科目担当教員と打合せ、学習内容の調整をしている。</p> <p>美・デザイン、医療事務コースでは、基礎ゼミナールを2クラス化して学生の居場所づくりやグループ活動の基盤を整備したほか、海外研修も視野に入れて英語授業の履修促進もしている。</p>
<p>2 入学者受け入れの方針</p>	<p>・学生募集の方針と現状</p>	<p>受験生が本学科のアドミッションポリシー(入学生受け入れ方針:AP)を確認できるよう、その方針を今年度も引き続き大学ホームページで公開するとともに、募集要項に明記している。高校の教員や生徒に対し、直接、アドミッションポリシーを説明する機会である地区別大学説明会では入試広報課員が、オープンキャンパスや(離職者等)委託訓練説明会では学科教員が、それぞれ説明を担当している。また、国内の留学生に対しては、オープンキャンパスに参加した際に、個別説明の時間を設けた。</p> <p>これらの取組みの結果、入学予定者数は、日本の高校の新卒学生35名、離職者等委託訓練生10名、留学生50名となり、昨年度に引き続き定員を超える入学者を確保することができた。</p> <p>受験者数が少ない美・デザインコースの教育内容を検討し、2025年度入学者より「ビジネスデザインコース」と名称を改め募集を開始することとした。</p>

短大基準協会	事業計画	内容と成果
3 受験生に対する受け入れ方針の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高大連携講座</li> <li>・オープンキャンパス</li> <li>・多媒体での広報</li> <li>・留学生受け入れに関する活動の推進</li> <li>・離職者等委託訓練生受け入れに関する取組み</li> </ul>	<p>高大連携講座を済美高等学校と山県高等学校の2校の生徒を対象に本学で実施した。済美高等学校の連携授業は、本学に入学した際に「基礎科目「教養基礎（2単位）」の単位が認定される「めざそう快護人講座」として、普通科健康福祉コース2・3年生を対象に8月29日（月）30日（火）に実施した。さらに、学科教員が済美高等学校の普通科健康福祉コースの授業を月1回（3年生は4～7月、2年生は4月～2月）1コマ（50分）担当し、介護福祉に関連する授業を実施した。これらの取組みについて、参加した高校生を対象に実施したアンケート調査の結果は、概ね高評価であった。</p> <p>済美高等学校における、美・デザインコース、医療事務コースの高大連携講座の実施については、コース会議や学科会議で議論した結果、現状を踏まえながら適宜情報交換をしていくこととなった。</p> <p>山県高等学校の連携授業では、9月11日（月）に、18名の2年生を対象に介護支援機器を活用した移動・移乗介助についての模擬授業を行った。</p> <p>7校の高校内ガイダンス「職業別説明会」や出前講座に出向き、模擬授業や職業の説明などを実施した。</p> <p>3月と5月から8月に計6回のオープンキャンパスを、通常日程かつ一日のプログラムで開催した。毎回、学生スタッフを適宜動員し、本学科の魅力を直接、高校生に伝えてもらうことができた。</p> <p>2023年3月～8月のオープンキャンパスの参加延べ人数は、「介護福祉コース」79名（生徒:55名、保護者:24名）、「美・デザイン、医療事務コース」129名（生徒:80名、保護者:49名）で、2022年度と比較すると、前者は18名減少、後者は26名増加した。</p> <p>コースごとに作成した紹介リーフレットを、県内の高校に郵送するとともに、毎回のオープンキャンパスなど高校生と関わる機会に積極的に配布した。</p> <p>【介護福祉コース】</p> <p>昨年度に準じて、岐阜県福祉介護人材対策事業の助成により、介護福祉の現場とそこで勤務する介護福祉士を紹介した冊子の作成・配布や、「高齢者えがお写真コンテスト」およびその展示会開催を通して広報活動をした。さらに、2024年度の（離職者等）委託訓練生募集では、募集チラシを新聞折込広告として配布したり、タウン誌の「さらら」や「たんとん」に訓練生募集の広告を掲載した。高校生と直接対話でき、学科の活動を社会に発信する機会となっている「中高生介護体験セミナー」（岐阜県福祉介護人材対策事業の助成による活動）に高山会場において2名、高等学校を対象とした募集に対しては1校の参加があった。</p> <p>【美・デザイン、医療事務コース】</p> <p>「映像プレゼンテーション」および「地域を支えるコミュニケーション」の授業として各務原市観光協会との連携企画を実施し、学生が作成した観光地・商品紹介動画およびその取組みが、各務原市観光協会のホームページ及び各務原移住促進のホームページで公開された。また、「言語コミュニケーション」の授業の一環としてFMわっち「てにておラジオ」に1年生が出演し、学生生活の様子や「自分のお気に入り」を紹介した。</p> <p>2023年度では33名の留学生が入学し、その多くが本学の日本語別科で学んだ学生であった。日本語学習の履歴も明確であり、介護事業所からの支援を受けていることもあって、介護に関する理解や意欲が高い学生となっている。留学の受け入れ活動については、入試広報課が中心となって広報活動を担い、入学決定後は国際交流・留学生支援課が入国手続き等の支援を担っている。また、留学生を支援する各事業所とは7月と3月に情報交換会を開催し、留学生の学習状況や支援上の課題等について報告と意見交換を行っている。</p> <p>このほか、大多数の留学生が活用する岐阜県介護福祉士等修学資金について、岐阜県高齢福祉課に対して貸付資金の原資確保を要請した（岐阜県介護福祉士養成施設連絡協議会からの要請事項）。</p> <p>今年度は8名の訓練生が入学した。学年ごとに訓練生アワーをキャリア支援センターと学科担当教員が開催し、学修や就職に関する支援を実施した。</p> <p>次年度の離職者等委託訓練生の募集に向け、在学生に協力してもらい広報用のチラシを作成した。そのチラシをタウン誌（さらら、たんとん）に掲載した。加えて、長良川鉄道（美濃太田駅・関駅）構内と岐阜県内の3か所で開催した「高齢者えがお写真展示会」で掲示した。さらに、職業訓練生募集の窓口であるハローワーク（美濃茂茂、関、大山、一宮、各務原、郡上、大垣）に赴き、本学科の介護福祉士養成についての認識を高めてもらった。また、ハローワーク岐阜と多治見での離職者等委託訓練生の募集説明会に参加するとともに、本学（関キャンパス、各務原キャンパス）でも募集説明会を4回（1月6日（土）、1月20日（土）、2月17日（土）、2月24日（土））開催し、在学中の訓練生と一緒に参加者への情報提供をおこなった。</p>
4 学習成果の査定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・達成度評価の検討</li> <li>・IRデータに基づく学習成果等の分析</li> </ul>	<p>学科のディプロマポリシー（学位授与方針:DP）に基づき、卒業生に身に付けさせるべき能力が備わっているかを評価するための「大学教育評価（卒業生・就職先）」を、8月～9月にかけて実施した。その結果、回収率は卒業生対象調査では40.0%、事業者対象調査では40.4%であった。事業者側は卒業生の就労状況への満足度が高い傾向にあった。また、卒業生については、現在の職業（就業）にある程度満足している者が大多数を占めていた。しかしDPに示されている能力について、卒業生は全体的に修得度が高いと評価しているが、事業所側では、特に「主体的に問題を発見し解決する力」の修得度が低いことが示された。</p> <p>【介護福祉コース】</p> <p>介護実習における介護技術の修得度評価（ルーブリック評価表を用いた評価）を継続的に実施している。実習後に学生自身で評価をおこない、その結果を次の実習で修得できるよう確認をおこなっている。</p> <p>【美・デザイン、医療事務コース】</p> <p>有給インターンシップ受入先と継続協議の上、到達度をはかる評価表（10項目5段階評価、就業～退職までに90時間ごと4回評価）を準備し試用した。</p> <p>アセスメントテスト（PROGテスト）は2021年度に今後の在り方について検討し、2023年度までは継続するとの決定で実施したが、効果的な活用が困難であるため、2023年度末をもって廃止となる予定である。2024年度以降は、本学の企画戦略課が中心となって行っている「学生調査」、「卒業時学生調査」において「学修成果の可視化を趣旨とした設問」を配置し、アセスメントテスト（PROGテスト）の代替とする。</p> <p>「学生調査」、「卒業時学生調査」は従来の「学生総合調査」の設問内容を見直し、2022年度から実施している。2023（令和5）年度の実施については、2023年12月から2024年3月に行われた。学生が回答しやすいように、Web回答（office365のアンケート機能を使用）ができるようにした。</p>
5 学生の卒業後評価（卒業教育の取組み）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業生の把握と同窓会の組織化</li> <li>・卒業教育（介護福祉セミナー）</li> </ul>	<p>企画戦略課とキャリア支援センター事務課が対応した「大学教育評価」にて、学科のディプロマポリシーに基づき、卒業生に身に付けさせるべき能力が備わっているかを評価するとともに、卒業後半年たった時点での就業状況を把握した。また、10月21日（土）に関キャンパスで開催した大学祭（たのしみん祭）で、介護福祉コースを紹介するコーナーを設置し、来場した卒業生と交流を図ると共に、情報収集をした。さらに「ホームカミングデー」が同時開催され、多くの卒業生と交流を図る機会を設けた。また、11月3日（金）に各務原キャンパスで開催した「学びの森フェスタ」では、美・デザイン、医療事務コースが参加をし、来場した卒業生と交流を図った。</p> <p>9月20日（水）に開催した「介護福祉セミナー」終了後に「卒業生の交流会」を開催し、4名の卒業生が参加をした。</p> <p>なお、2022年度および2021年度卒業生については、年度毎のグループLineを作成しており、そこから「大学教育評価」や「介護福祉セミナー」などの案内を送信した。</p> <p>2023年9月20日（水）10:00～15:00に、「介護の力を“可視化”する一日々の実践から介護の本質を伝える力へ」をテーマに対面で開催した。今回は「社会福祉学科30周年記念行事」と位置づけ、社会福祉学科での教職歴がある日本社会事業大学の壬生尚美教授にも講演を依頼し、卒業生の参加を促した。</p> <p>152名（スタッフ7名を除く）の参加があった。無記名自記式の集合調査法とオンライン（インターネット）調査法による質問紙調査によってセミナーを「とても良かった」から「良くなかった」までの5件法で評価を得た。その結果、全てのプログラムで7割～9割で「とても良かった」「良かった」が選択され、満足度が高かった（回収数=125、回収率=82.2%）。</p>

短大基準協会	事業計画	内容と成果
B 学生支援		
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用	・FD活動への取り組み(授業改善に向けた取組み)	<p>短期大学部としては、FD委員会を中心としたFD活動として、2回の研修会を実施した。9月27日(水)の16:00～17:35に実施した1回目は、18名(参加率85.7%)が参加し、「大学教育評価アンケートの結果からみる今後の短期大学部のカリキュラムについて検討する」をテーマとしたグループワークを実施した。この研修では、「卒業生と就職先による大学教育評価」の質問項目内に学科のカリキュラムを評価する質問項目を追加したweb調査等の結果を基に、学科の教育課題を明らかにし、その対応法についての意見交換をした。その結果、介護福祉コースの課題として、「認知症への対応およびコミュニケーション技法に関する授業内容の強化」が挙げられた。その課題に対する取組みのひとつとして、かねてからの懸案事項である、「地域で暮らす認知症高齢者とその家族介護者の生活に介入する地域介護実習やゼミ活動」の実施を推進する必要があることを確認した。2024年3月14日(木)の13:00～14:30に実施した2回目は、「教育・研究活動における倫理とは何か」をテーマとした岐阜大学医学系研究科の塚田敬義教授による講演を大学と合同開催した。この研修会に、本学科教員9名中7名(参加率77.7%)が参加した。情報通信技術を有効活用した研究活動に向け全教員が研鑽を積んでいる中、文部科学省の「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を基に、過去に発生した研究倫理に関する規定違反具体例の紹介などがあり、注意喚起がなされた。介護福祉コースでは、介護福祉士養成教育に求められている「介護ICTカリキュラム導入」と「留学生の教育体制および教育方法の充実」に向け、複数の教員が、日本介護福祉士養成施設協会全国教職員研修会(10/27(金)9:30～17:00)および同東北陸ブロック教職員研修会(11/27(月)15:00～17:00)、(㈱ケアオネクトジャパン「学生応援プロジェクトから始める介護ICT教育セミナー」(11月25日(土)13:00～16:30)等、多様な研修会に積極的に参加し、研鑽を積んだ。</p>
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・入学時の学習適応への支援(入学前研修、基礎ゼミの活動、宿泊研修、その他) 初年次教育	<p>〔介護福祉コース〕 2022年度と同様に「入学前研修」を実施し、入学後の学生生活や学修への適応を支援した。 新型コロナウイルス感染予防のため、昨年度と同様、「博物館明治村」での日帰り研修を5月に実施した。1年生60名がゼミを基準に6～7名の小グループで事前に見学ポイントを決め、当日はその計画に基づいて村内を周った。記録を写真で報告することで、学生間や教員との関係性を深めることができた。「大学祭(たのしみん祭)」、「介護の日の啓発活動」に1年生全員で取組むことで、新卒学生、訓練生、留学生の交流を図った。2022年度は学生の希望中心にグループ分けをしたところ、メンバーの偏りが見られた。そこで2023年度は「博物館明治村」はゼミ単位、その他の活動は学生からプログラム案を募集し、そのプログラム毎に希望学生を募るといったグループ分けをした結果、メンバーの偏りはあまりみられず、学生間の交流を促進することができた。 「初年次教育」として、基礎学力と学生の自主的な学びを支える学習スキルの習得に向け、「基礎ゼミナール」の授業において、①ドリル形式のワークシートを使用した教育と、②文書作成の基本プログラムに基づいた教育を実施した。 学生主体の活動である「大学祭(たのしみん祭)」での社会福祉学科のブース企画や「介護の日の啓発活動」に、1年生全員が役割をもち取組むことができた。また、異文化理解・交流を目的とする「アジアの保健福祉についてのオンライン講義」の実施を通して、学生の海外への関心を高めることができた。 入学後に実施したアセスメントテスト(PROGテスト)は、基礎ゼミナールにて、個人結果の確認を指導し、夏休み課題レポートとして、「テスト結果を踏まえての後期の学生生活について」を提示した。 〔美・デザイン、医療事務コース〕 基礎ゼミナールでは、「読む・聞く・話す・まとめる」といった、大学における基礎的な学習スキルを身につける学習や活動を進めた。書籍や文字に触れる機会を得るために選書ツアーを行い、その後POPを作成し、図書館に掲示した。POP作成することにより、読む、まとめる、といった基礎的な能力とともに、知らない相手に伝える力を育成した。また、様々な体験型科目で、外部の団体、企業と連携することでコミュニケーション力、発信力を涵養した。 7月には各務原市と共催した「親子ふれあいフェスタ」に、また11月には「大学祭(学びの森)」に1～2年ともにゼミ活動として参加した。多数の地域住民の参加がある中、事前の計画立案から実行、実績のとりまとめから改善計画の立案まで、業務遂行のための実地学習の実現を目指した。 「美体験海外研修」はコロナ後初めて実施する運びとなったが、円安進行と現地物価上昇によってハワイ渡航費が高騰していることを考慮して今年度は目的地を台湾に変更した。募集に対して16名の参加表明があり、3月初旬に実施した。</p>
	・国家試験対策	<p>〔介護福祉コース〕 国家試験の合格状況と国家試験対策の効果を評価し改善するための「質問紙調査」の結果から、2023年度は、次の対策を実施した。 ①1年次の後期に購入する国家試験対策本をドリル形式からポイントがまとめた内容の書籍に変更した。自己学習を促し、10月14日(土)に2年生と同じ部屋で模擬試験を実施した。Formsによる調査結果より、普段の授業の大切さや自己の得意・不得意分野の把握に繋がったなどの声が聞かれた。②アルバイトよりも国家試験受験に向けての学習を優先させることを促す環境作りと、新卒学生、留学生、訓練生混合のグループ学習の促進を目的として、木曜4限にゼミナール単位の「グループ学習」を実施した。③図書館やラーニングコモンズの蔵書整備を学生の希望を取り入れながら対応した。④2年次後期に、日本人学生と留学生のクラスに分けての国家試験対策を実施した。⑤連携事業所に国家試験対策の年間スケジュールを郵送し、国家試験合格に向け事業所の理解と協力を促した。⑥国家試験対策講座や模擬試験の度に、Formsを利用して学生自身が振り返りを行う時間を設けた。 その結果、新卒学生と離職者等委託訓練生は全員が国家試験に合格した。留学生の合格率は85.7%(昨年度は36.8%)と全員合格には至らなかったが、昨年度より45.7%高まり、過去最高の成績となった。</p>
3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援	学生生活支援の取り組み	<p>今年度の介護福祉コースの入学生の中には、入学当初から基本的な生活や学習面において多くの課題を持つ者が一定数存在し、また2年生も同様の課題をもつ学生がいた。1、2年生共に、生活面に課題のある学生に対して、授業の中で役割意識を持たせる工夫をしたり、ゼミナール担当教員が中心になり出席状況を常に把握しながら単位取得に向け学修支援を実施した。課題のある学生に対しては、ゼミナール担当教員が中心になり、適宜本人及び保護者面談等を実施した。 3コース(介護福祉、美・デザイン、医療事務)全ての学生が必要な単位およびめざす資格の取得ができるように、ゼミナール担当教員が課題のある学生個々の学習の進捗状況や欠席回数、生活状況を学科会議で報告し、学科教員全員の共通認識の下で指導・支援方法を検討し対応した。その他、課題のある学生に対しては、保健室、学生相談室、学生支援室と連携しながら対応した。</p>
4 進路支援	就職率100%に向けた取り組み	<p>キャリア支援センター課員と連携し、1年次より就職ガイダンスを行い、就職活動への意識付けを行った。また介護福祉コースの学生(留学生以外)を対象とした「学内福祉の仕事相談会」を7月5日(水)15:00～17:00に開催し、介護現場職員と面談をおこなう機会とした。そこには、2年生対象35名中32名が参加をした。また2年生の職業訓練生に対しては、就職支援として5月10日(水)に訓練生アワー、6月24日(土)は卒業生による就職活動についてのレクチャー、7月と1月に個別面談を実施した。美・デザイン、医療事務コースの学生は、キャリア支援センター課員より学外開催の就職ガイダンス情報を紹介するなど、就職活動の情報提供をおこなった。 学科のキャリア支援委員と2年次のゼミナール担当教員、キャリア支援センター課員より常に連絡を取りながら個別対応をおこなった。特別に支援が必要な学生に対しては、ゼミナール担当教員より情報提供を受け、学科会議での検討やキャリア支援センター課員との情報共有により統一した支援をおこなった。 以上の結果により、今年度卒業生の就職希望者全員が就職することができた。</p>

短大基準協会	事業計画	内容と成果
<b>基準Ⅲ 教育資源と財的資源</b>		
<b>A 人的資源</b>		
教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員研修</li> <li>・研究状況</li> </ul>	<p>教員は、教育・研究力向上に向け、各自の専門分野の学会誌への論文投稿および学会参加や研修会への参加等によって研鑽を積んでいる。その支援のために、学科予算を組み学会や外部研修への積極的参加を図っている。</p> <p>2023年度は、本学科の専任教員を研究代表者とする2件の科学研究費助成研究が継続されている。</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際交流活動の実施</li> </ul>	<p>コロナ禍による情勢を鑑み、今年度は、行き先をハワイから台湾に変更しての「美体験海外研修」を実施し、16名の学生が参加した。また、オンラインでの「アジアの保健福祉講座」を実施し、1年生全員が参加した。他方、フィリピン・ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修とMKDからの短期留学生2名の受入れについては今年度も中止とした。</p> <p>その他、特徴的な国際交流活動としては、インドネシア教育大学との学術交流に関する連携協定締結を発端とし、2023年6月26日に、「インドネシア文化交流会」が本学で開催された。その交流会に、本学科の1年生が参加し、ユネスコの無形文化遺産に登録されている楽器「アングルン」による演奏とインドネシアの伝統舞踊である「ジャイボンダンス」を鑑賞した。また、留学生が地域の文化に触れたり、日本人学生と留学生が交流を図る「L.E.A.P. Plaza国際交流イベント」を年間を通して実施している。そのひとつとして、2023年11月16日（木）に、国の重要無形民俗文化財で、ユネスコ無形文化遺産に登録されている「郡上踊」をキャンパス内で体験する「Let's Try Gujo Bon Dance」が開催された。お招きした郡上踊り保存会のメンバーと学生、教職員と一緒に踊りの輪を作り日本文化の魅力に触れた。さらに、学科独自の学内企画として、10月21日（土）の大学祭（たのしみん祭）で、本学科の留学生がミャンマーの民族舞踊を披露し、来場者との文化交流を図った。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍における教育活動</li> </ul>	<p>2023年度は5月に新型コロナが5類となり、1年を通し対面授業となった。介護実習や地域活動、有給インターンシップおよび歯科助手実習では、引き続き感染対策をしながら行った。実習先の指針に従い、マスク着用、手洗い、健康観察を続けた。介護実習においては実習先の指示に従い「抗原検査」等の対応を行った。また、実習先での感染症の発生状況により実習開始時期を延長し実施した。</p> <p>生活支援技術では、体温及び諸症状チェック、マスク着用、手洗いに加え、手指の消毒、換気等を適宜実施した。口腔ケアや食事介助等の支援内容によっては、感染予防対策の観点から演習内容を変更して実施した。地域住民の授業協力や交流活動については、飲食を共にすることは控える等、感染予防対策に努めつつ実施を再開した。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTの活用（2023）</li> </ul>	<p>今年度は、短期大学部1・2年生ともパソコンが貸与されている。新入生は、オリエンテーション期間中に、教員の説明に従って学生が自分のパソコンを操作して履修登録と教科書購入をすることができた。授業においては、科目の特性に応じたパソコンの活用が次第に進み、「Teamsおよび中部学院ポータルでの資料の共有や課題の提示と提出」、「Formsでのアンケート調査や授業内容の理解度確認（ミニテスト）」などを学生のパソコンを使用して実施している。</p> <p>介護福祉コースでは、2024年2月に行う実習の実習記録の一部について、パソコンでの作成、紙媒体での提出を許可した。また、それに伴い、個人情報の匿名化・紛失及び散逸の防止に関する文章を作成し、実習巡回担当教員・実習施設及び指導者・学生それぞれに対して説明を行った。また、ICTを活用した介護について、教員が研修会に参加し、次年度の教育内容の検討を行った。</p>